

広島大学蔵『こまの物語』のまやかし

—『うつほ物語』伝流過程における一様相—

猪 川 優 子

はじめに

広島大学附属中央図書館に、鼠色の表紙中央に「こまのゝ物かたり 全」と墨書された二冊の写本が存する。本文第一丁冒頭行の端作題も「こまのゝ物語」となっており、一見、新出の物語かとも偽書のかとも思わせる謎の一冊である。

まず書誌を記す。書型は大本(縦27・0cm×横19・3cm)、体裁は袋綴の全41丁。一面行数は十二行、和歌は改行して約四字下げで区別しており、さらに上下句を二行書(下句はやや下げ)に統一している。保存状態は、虫損もなく良好。図書番号は表紙右肩のラベルより「国文二一八六N」、登録番号は前見返中央やや下方の印より「広島大学図書・文・一八二二九」。朱印は「広島大学図書之印」と大小二種の印がそれぞれ前見返中央やや上方と第一丁表右肩に押されている他、第一丁表右下に「城戸蔵」という蔵書印が押されている。この後者の印は旧蔵者のものであるが、詳しいことはわから

ない。城戸姓ですぐに思い当たるのは、江戸期の国学者であり書肆であった城戸千楯(安永七年(一七七八)〜弘化二年(一八四五))であるが、関連性の有無については現時点ではまだ調査が行き届いておらず、今後の課題としたい。広島大学が所蔵する和古書類の伝来を詳細に検討する必要がある。

一 『こまの物語』の正体

——実は『うつほ物語』吹上・上巻——

この『こまの物語』は、内題・外題のみならず、物語本文の書写の後に三行置いて「こまのゝものかたり 終」と書かれており、書名が統一されている。

「こまの物語」という書名で思い浮かぶのは、『枕草子』や『源氏物語』蜚巻に引かれる物語名であろう。まず『枕草子』一九八段「物語は」章段では「こまの物語は、古蝙蝠さがしいで、持ていきしがをかしきなり。」と述べられ、二七三段「成信の中將は」章段では「こまの物語は、なにはばかりおかしきこともなく、こと葉もふるめき、見どころおほからぬも、月にむかしを思いいで、虫ばみたる蝙蝠とり出て、「もとみしこまに」といひてたづねたるがあらはれなるなり。」と少し詳しい説明がなされている。『源氏物語』では、河内本が「こまの物語」としている他は「くまの物語」となっているものが多いのであるが、柴の上が、この物語の絵に小さい女君が無心に昼寝をしている姿が描かれているのを見て、昔の自分を

思い出すという場面が引かれている。

では本書が、古来散逸とされてきた『こまの物語』なのであるうか。そうであるならば一大事なのだが、残念ながらこの物語には『枕』や『源氏』にあるような内容は描かれておらず、古物語の『こまの』ではなさそうである。それでは一体何なのか。

本書は「むかし、紀伊国むろの郡に、こまのたね松といふ長者、かきりなききよらの王にて、たゞ今国のまつりこと人にてかたちきよけにてころつきてあり。」という一文で始まる。このような冒頭を持つ物語はというと、若干相違があるものの『うつほ物語』吹上・上巻が重要候補として浮上し、物語の中味を照合した結果、間違いないということが判明した。この事実は、すでに稲賀敏二先生³が指摘しておられるのであるが、簡単な紹介をされているだけなので、ここではもう少し詳しく本書の様相を述べる。

冒頭文の相違は二箇所存する。まず書出の「むかし」。『うつほ』の書出は、前田家本をはじめとして「かくて」である。『うつほ』では長編物語の途中であるという位置付けからの書出であるが、『こまの』では一つの完結した物語としての体裁を、冒頭で採っているわけである。もう一つの相違点は、「こまのたね松」なる人物の登場である。前田家本『うつほ』では「かみなひ（神無備）のたねまつ」とあり、諸本もこれに準ずるので、『こまの』の独自本文といえよう。

本書の題はこの「こまのたね松」に由来すると考えられるが、ただし他の箇所において「こまの」が用いられている例はなく、神無備

姓として書かれている。

本文に目を向けると、冒頭文の問題を除いて、多少の異同はみられるものの、特に改作されているわけではない。現在「絵解き」と呼ばれている部分も存しており、前田家本と同じく、本文に区別なく書写されている。大きな特徴としては、途中に二箇所の白紙部分を設けて、物語の内容を三つに区切るという処理が施されている点が挙げられる。具体的には、第十四丁裏・第二十八丁裏が白紙となっているのであるが、仮に第一展開・第二展開・第三展開と名付けると、第二展開は『うつほ物語の総合研究1・本文編・上』³では二七四頁六行目の「かゝるほどに、はまのほとりの花、さかりになりぬ。」ではじまる箇所から、第三展開は二八八頁一行目「かくて、ふきあげの宮には、「おほんたかども心みたまうて、（略）」とおぼして、ではじまる箇所からとなっている。分量的にほぼ三等分であり、もともとごく薄い三冊本であったものが、合綴された可能性がある。ちなみに、第一展開は、源涼の紹介から仲忠たちが吹上を訪れて接待を受けるまで、第二展開は、林の院における花宴から種松が準備する贈り物および種松の住居説明まで、第三展開は、鷹狩りから最後の仲頼の参内までとなっている。

二 本文の状況および書入の態度

本書を前田家本と比較すると、目立った脱落が二箇所存する。まず『本文編』二七二頁「大将殿の君たちは、さものし給なり。おと

こ・女など、人に、こよなくまさり給へり。その中にも、おとこは七郎にあたり給じう、」の傍線部、もう一箇所は数行にわたる脱落であり、『本文編』二九三頁「かんのぬし、くにのうちをこそぞりてみをくりし給へり。せぎのもとまづ。」[こ]は、ふきあげのみや。ころもがへしてなみぬ給へり。むまどもひきいで、こまあそびしひできたり。たかどもすへて、とりのまひしひできたり。しろかねのはたごども、はこにひとわれてあゆませてひきいでたり。やりみつに、こがねのふねどもきぎつらねて、ふねあそびして、みそひつ・すわうのすりなど、をまへにとりいでたり。すきはこも。これは、きむたち、なをしすがたにて、のりつらねていでたち給へり。こは、せぎのもと。くにのかんぬし、(略)「」の傍線部である。いづれも「おとこ」「せぎのもと」という語句からの目移りであると考えられる。また、一箇所脱落が頭注で補われている箇所があり、『本文編』二八四頁「しか・とりにつくりすゑ、いとおかしげに、おほきやかなるこがねのふねすへ、それに色くゝのゑとむすび、」の傍線部である。本文の該当箇所には小さく丸印が付されている。

本文の異同で注目されるのは、前田家本の「ほに」が「ほと」となっている点、仲忠が涼に贈る琴の名が前田家本で「やとりかせ」とある所が「宿守風」としてある点が挙げられる。

本書には、書入が多いのが特徴である。本文の平仮名書の右に漢字を傍書しているものが多いが、漢字に振り仮名をおくる箇所も見られる。漢字の傍書をいくつか例にとると、「車渠(しゃに)」「瑤瑤

(めのう)「轆轤(ろくろ)」「椽(つるはみ)」といったかなり難解な字も書かれており、振り仮名の場合では「茵(いん)」「折櫃(オリヅ)」「尻轄(シラヤ)」などに施されている。この書入を見ると、かなり素養のある人物の手によるものと思われ、仮名書きの本文をより理解しようという姿勢が窺える。ただ、伝流の過程で漢字表記が増えていくということは、理解を助ける一方、混乱を生じさせる一因となる場合があることは注意したい。本書には「琴」の字がすでに傍書ではなく本文の時点で多用されており、表記上「きむ(きん)」と「こと」の区別がつかない場合が多い。伝流過程における本文の後退の一例といえよう。

三 『こまの物語』跋文——書写者の物語理解

本書には、跋文が存する。以下に全文を掲げる(私に句読点および傍線を施した)。

清の納言枕草子。物語は、こまのゝ物語はふるまかはほりさし出てもいにしかおかしきなりといへり。今この事此物語に見えず可尋。源氏蛩巻に、こまのゝものかたりの絵にてあるを、いとよくかきたる絵かなとて御らんす。ちいさき女君の、何心なくてひるねし給へる所を、むかしの有様おほし。て、女君は見給ふ。かゝるわらはとちたに、いかにされたりけん。まるころなをためしにしつへく、心のとけさは人に似たりけれときて出給へりと。此事も、このものかたりに出す。されはこの物語は、昔のこまのゝ物語はあらざるか。此もの語にこまのたね奈とい

ふ事はかりにて、狛野といふ事なければ、これはこま物語などいひて、こまのゝものかたりと云は各別のものか。なかく後種の物語とは見えす。源氏以前のものかたりと見ゆれば、是も一種の物語と心うへし。

跋文の筆者は、自分なりに『こまの物語』という未知なる物語を検討する。まず、『枕』『源氏』に書かれる「こまの物語」の内容と照合して別の物語であることを確認し、「こまのたね姿」からきた題であろうとする。しかし、傍線部のように、筆者はこれを中世以降の擬古物語とは見ず、あくまでも『源氏』以前の物語であろうと位置付ける。しかし『うつほ』の名を挙げることはない。筆者は、

『うつほ』であると知らないまま、物語の中味を吟味して成立時期を導き出したのであろうか。もしそうであるなら、考証能力の高さは認められるものの、『うつほ』に関する知識に欠けるという素養の偏りがある人物となってしまう。ここに、この人物の謎が残される。

おわりに

『こまの』は、『うつほ』吹上・上巻全文を一つの物語として独立させたものであった。稲賀先生は、これを「まやかしもの」と呼ばれ、「それはそれなりに、こんなにせ物があらわれる時代を考えて見るのも、一つの問題点たるを失わない。」と提示しておられる。たしかに、散逸物語の名を連想させる思わせぶりのな題をつけ、跋文では古物語の同名書とは異なると断りながら、『うつほ』の名を挙げるこ

となく源氏以前の物語であると位置付ける、ここには何らかの作爲を感じざるを得ない。あるいは城戸千楯あたりのいたすらかもしれない。本居宣長に学んだ千楯が『うつほ』を知らないとは思えないので、その可能性も否定出来ず、そう考えたと面白。

『うつほ』の各巻を独立させて一つの物語に仕立てるという方法は、長編物語が分冊されて伝流した経緯における、一つの形であろう。そこに、『うつほ』の、世に知られている巻名以外の名を冠することもあると、『こまの』は示している。『うつほ』には、まだまだ埋もれた伝本がある可能性が高く、今後も調査を続けていきたい。

【注】

(1) 段数および本文の引用は、新日本古典文学大系『枕草子』(渡

辺実校注 平3 岩波書店)。

(2) 本文の引用は、私に翻刻をしたものに句読点を加えて用いた。

(3) 「枕草子」(「国文学解釈と鑑賞」古典文学研究の方法と技術

第29巻第6号 昭39・6 至文堂。稲賀先生は、同大学所蔵の

「越後在府日記」(実は和漢の典籍の抜書)を紹介する中で、本書についてふれておられる。

(4) 室城秀之他編『うつほ物語の総合研究1・本文編・上』(平11 勉誠出版)。一部私に傍線を施した。

(5) 前掲(3)。

——いかわ・ゆうこ、広島大学大学院博士課程後期在学——